渡りをする猛禽類の生態特性

中村浩志（信州・教育・生態研）他信州猛禽生態研究グループ

日本で繁殖するワシ・タカ猛禽の中で、サシバとハチクマは、冬は東南アジア等で過ごし、春に日本に渡って来て繁殖する夏鳥タイプの猛禽を代表する鳥である。最近、これら 2 種の日本での繁殖生態や渡りに関する研究が進み、共に特殊な繁殖生態と渡り様式を持った対照的な猛禽であり、また共に保護を必要とする貴重な猛禽であることがわかってきた。今回のシンポジウムの最初の講演として、これまでの研究からわかってきた日本で繁殖するワシ・タカ猛禽の中でのこれら 2 種の生態の特徴について、考察することにしたい。考察をする上で根拠とした資料は、信州猛禽調査グループが 1999 年から里山の猛禽を対象に実施してきている各種猛禽類のテレメトリー調査と猛禽の巣に小型カメラを設置した巣での繁殖行動と巣に運ばれる餌内容についての研究成果である。

長野県を例にするとサシバとハチクマが渡って来るのは、それぞれ 4 月上旬と 5 月中旬で、留鳥の里山猛禽類がすでに繁殖に入っている時期に渡ってくる。渡って来るとすぐに造巣活動に入り、一週間から 10 日間ほどで巣を完成し、産卵する。留鳥の猛禽類が早い時期から 1 ヶ月から数ヶ月かけて巣を完成させるのとは、対照的である。また、雛が巣立つ時期もサシバは 7 月上旬、ハチクマは 8 月中旬と遅いことも特徴である。

共に低山帯にあたる里山的な環境で繁殖するが、両者には際立った繁殖生態の特殊化が見られる。サシバは、山間地の流れに沿って水田が細長く広がり、周りを林で囲まれた、いわゆる谷津田と呼ばれる日本の特異な環境へ特殊化である。狭い行動圏を持ち、その環境内で得られるネズミ、モグラ等の小型哺乳類、ヘビ、トカゲ等の爬虫類、カエル等の両性類、さらには昆虫類といった多様な動物を餌としている。一方、ハチクマは、スズメバチやジバチ等のハチ食に特殊化しており、雑木の落葉広葉樹林、アカマツ等の針葉樹林、スギ、カラマツ等の植林地など、里山の多様な森林環境を広く使い、広い行動圏を持っている。これら両者に見られる生息環境や餌への特殊化は、留鳥である里山の猛禽類との生息環境や餌をめぐる競合を避けるために成立した適応と考えられる。

サシバは、繁殖期を通して狭い行動圏をなわばりとして防衛し、個体によりまた年により餌内容が異なる傾向がある。一方、ハチクマの方は、餌内容には地域や個体、年による違いは少なく、ハチの得やすさと関係し，繁殖ステージおよび年により行動圏の面積が大きく変化する。多くの猛禽類に見られる行動圏をなわばりとして防衛する行動は見られず、隣接個体との行動圏は、大きく重複している。ハチ食に特殊化したクマタカには、形態のほか、雌雄が日に 1 回か 2 回抱卵交代するなど他の里山猛禽では見られない特異な繁殖生態を多く持つことが明らかになった。

以上のように特異な生息環境と餌にそれぞれ特殊化したサシバとハチクマは、最近の生息環境の悪化により、少なくとも長野県ではオオタカ以上に生息数が少なく、貴重な猛禽であることが明らかになってきた。